

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	ラオスにおける障害者ケアの研究-身体障害を持つ女性に着目してラオス社会を捉える-
氏名 Name	好光 百合
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア地域研究専攻 2年
渡航国 Country	ラオス
渡航日程 Travel schedule	2023年8月28日 ~ 2023年10月1日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

《研究目的》

本研究の目的は、障害者の生活に不自由があるのは制度的障壁や偏見、社会的排除といった社会自体に障害があるからだとする「障害の社会モデル」に基づき、ラオスにおいて女性身体障害者の生活やケアの実態を調査し、ラオス社会がどのような「社会の障害」を抱えているのかを明らかにし、女性身体障害者が生活する上で直面する課題点を明らかにすることである。

《調査地・調査対象》

本研究の調査地は、首都・ヴィエンチャン特別市内にある身体障害者による当事者団体「Xonpao Lao Disabled People Working Group」（以下、Xonpao 作業所とする）の職業訓練支援のための作業所兼寮を調査地とした。Xonpao 作業所は、ラオス人女性身体障害者である Phouth Alee 氏によって 2017 年に設立され、靴やアクセサリ等の手工芸品製作・販売での障害者職業訓練・雇用支援を実施している。Xonpao 作業所には、2023 年 9 月現在、女性 8 名、男性 8 名の障害者と非障害者 2 名（障害者の配偶者や子ども）、非障害者の職員 2 名、そして運営者 1 名（Phouth Alee 氏）の計 21 名が所属している。

調査対象は、Xonpao 作業所に所属する女性身体障害者 8 名を主とし、そのほか当事者団体の非障害者スタッフ、一部男性障害者にも聞き取りを行った。

《調査方法》

本研究の調査方法は、障害種別・年齢・家族構成・出身地・障害の要因など項目リストを作成してデータ収集を行うとともに、ライフヒストリーの聞き取りや作業所における女性身体障害者の仕事内容や日々の行動、作業所内の会話を観察し、休憩中・食事中に非構造化インタビューを行った。

聞き取り・インタビュー調査ではラオス語を用い、聴覚障害者へは筆談による聞き取りを行った。

成果 Outcome

① 項目リストによるデータ収集

以下、項目リストによって収集したデータ内容である。

名前	年齢	出身地	障害の種別	障害の要因	障害をもった時期	家族構成
L氏	33歳	ボケオ県	右足不自由	ワクチンによるポリオ感染	生後6カ月	父、母、第1人息子1人
N氏	23歳	フアパン県	聴覚障害	神経痛による疾患	17歳	父、母、兄2人
C氏	35歳	ルアンパバーン県	左半身麻痺	ワクチンによるポリオ感染	生後1カ月	父、母、姉1人、兄2人、弟1人
N氏	37歳	ヴィエンチャン県	両足不自由	医薬品の大量経口摂取	生後6カ月	兄1人、妹3人、夫、娘1人
B氏	31歳	ポリカムサイ県	左半身麻痺	先天性	生まれつき	父、母、兄2人、姉3人、弟2人
T氏	39歳	ヴィエンチャン県	右足不自由	ワクチンによるポリオ感染	6歳	父、母、姉3人、妹1人、弟2人
Y氏	31歳	サラワン県	四肢不自由			父、母、夫
C氏	25歳	ヴィエンチャン県	視覚障害(右目のみ)			父、母

Xonpao 作業所に所属する女性身体障害者たちは、出身地はラオス北部・中部・南部と広く分布しており、障害の種別・要因もさまざまである。特に Xonpao 作業所では、ポリオに感染したことで、四肢不自由や両足、片足不自由といった身体障害を持っている女性が多い。ラオスでは、30 年ほど前、ワクチンにより生後まもなくポリオ感染するケースが小児に多く、ここでの女性身体障害者も同様のケースで身体障害者となった。

② 聞き取り・インタビュー

女性身体障害者たちのライフヒストリーから聞き取った内容を以下の項目ごとに事例を簡潔にまとめる。

1. 幼少期から青年期までの生活

ここでは、幼少期から青年期までの学校生活・家庭生活や友人・家族などの人間関係についてまとめる。ラオスにはヴィエンチャン県やルアンパバーン県を中心に障害児学級やろう学校、盲人学校があるが、Xonpao 作業所に所属する 8 名の女性身体障害者たちのほとんどが地方あるいはヴィエンチャン県郊外出身であるため一般の学校に通い、非障害児とともに授業を受けていた。ラオスの学校制度は、初等教育 5 年、前期中等教育 4 年、後期中等教育 3 年、高等教育 4 年となっているが、家庭の経済状況によって初等部や前期中等部で通学を諦めたり、自宅から学校が遠くにある場合は足が悪いために学校教育を受ける機会が全くなかったりする事例が見受けられた。例えば、C 氏 (35 歳) は、初等部 5 年間は通うことができたが、家庭の経済状況により中等部に入る前に学校をドロップアウトした。また、N 氏 (37 歳) は、生後 1 カ月から両足が不自由で且つ学校が遠く通う機会がなかったため、文字の読み書きができない。ラオスの障害児は以上の要因により読み書きができない人が少なくはないという(職員からの

聞き取りにより)。家庭での生活は、全員が親や兄弟姉妹によって生活の面倒をみてもらっていたと述べている。特に母親や姉妹が日常のケアの担い手となっているケースが多くみられた。

人間関係の構築については、障害が軽度で、ある程度身体を自由に動かせる場合、幼少期は村で障害児/非障害児関係なく友人と外で遊ぶなど友人関係を築いている一方、障害が重度（補助がないと歩けないなど）の場合は家で家族とともに過ごし、友人とあまり活発的に遊ぶ環境ではない傾向があった。しかし、幼少期から障害をもっている場合、友人や家族が本人の障害に配慮して活動を共にする関係性が構築できているが、N氏（23歳）のケースのように、友人などの人間関係が確立していた中で後天的に障害をもった場合は、障害によって人間関係に問題を抱えていた経験がある。N氏（23歳）は、後期中等部に通っていた17歳の時に疾患により突発的に耳が聞こえなくなったことにより、コミュニケーションがとれず、話しかけてくれる友人が減り学校での人間関係が障害をもつ前と後で大きく変わったと述べている。

2. Xonpao 作業所に来るまでの生活（青年期以降）

多くが村で親・兄弟姉妹によって生活の面倒をみてもらいつつ、家で家事の手伝いやシン（ラオスの女性の伝統衣装）や刺しゅうを縫うなど、ラオスでは一般的に女性の仕事とされるものに従事しながら生活をしてきた。N氏（37歳）は3年ほど村で物売りの仕事をした後、首都・ヴィエンチャン特別市にあるラオス障害者女性開発センターの職員が住んでいた村に来て紹介を受けたことから、2007年から2年間ラオス障害者女性開発センターでアクセサリー製作の仕事を受け持ち生活していた。同じように、N氏（23歳）は聴覚を失った直後に友人の紹介で、アジアの障害者活動を支援する会が運営する Minna no Café でろうスタッフとしてカフェで働き、手話を学んでいた。このように、Xonpao 作業所へ来る以前に、他の障害者支援施設で働き、生計を立てていた経験がある女性身体障害者もいたが、いずれも支援施設で働く前は村で家事などに従事していた。

3. Xonpao 作業所に辿り着いた経緯

Xonpao 作業所という支援に辿り着いた経緯は、3つのパターンがあった。1つ目は、身内・知り合いを通じての紹介だ。B氏（31歳）は、Xonpao 作業所の運営者のとの共通の知り合いから電話を受け、紹介をされたことで Xonpao 作業所へ来た。T氏（39歳）は、Alee 氏の祖母と自身の祖母が姉妹で親戚であることから Alee 氏に連絡をし、Xonpao 作業所で働くようになった。2つ目は、自ら SNS を通して Xonpao 作業所に連絡をするパターンだ。C氏（35歳）は、Facebook で障害者施設について調べていた際に、Xonpao 作業所について知り自ら連絡をした。N氏（23歳）は Facebook で Xonpao 作業所について知った母親の弟の紹介で入所した。3つ目は、ヴィエンチャン県やその他地方の県へ障害者を探すために派遣された障害者支援団体の職員によって施設を紹介されたケースだ。特に Xonpao 作業所は、他の障害者支援施設と違い、子どもや配偶者もともに生活できる寮が整っているため、子どもや配偶者が一緒に住めるように選んだと述べていた。

4. Xonpao 作業所での生活概要

朝から夕方まで、作業所内でアクセサリー製作を行っていた。男女混合でグループに分かれて作業を行い、女性身体障害者は全員アクセサリー製作に従事し、男性身体障害者も製作を行いつつ作業所に併設されているバタフライピー畑の作業、その他農作業にも従事していた。食事は、入所者同士が協力し合っていた。材料は比較的障害が軽度の男性身体障害者がバイクで市場まで買い物をし、調理は個人が行うこともあればグループごとに調理し、食事をしていた。このグループとは、Xonpao 作業所内で仲良くなった友人同士やよくコミュニケーションをとるメンバーごとで構成され、グループには入らず夫婦同士で作業や食事を行うケースも

あった。食事後（晩ご飯後）は、部屋で作業を続けたり、団らんしたりして各々の時間を過ごしていた。そして、入所者の全員がクリスチャンであることから、毎週水曜日に祈禱会を行い、最近の作業所内の様子の共有などミーティング要素も兼ねた時間を定期的にとっていた。また、毎週水曜日、金曜日にはラオス人ボランティアが英語を教える時間があり、女性身体障害者が1名、男性身体障害者が3名参加するなど、語学学習も行われていた。

5. 日常生活の移動手段

Xonpao 作業所には、ラオスの義足義手や車いすの製作を行っている施設である Cooperative Orthotic and Prosthetic Enterprise (COPE) によって寄付された車いす・障害者用自転車が常備されているため、それらを用いて作業所内での移動や外出を行っている。また、障害が軽度である女性身体障害者は自らヴィエンチャン特別市内で購入したバイク、或いは障害者用バイクを使用して外出を行っていた。両足不自由な N 氏（37 歳）や四肢不自由な Y 氏（31 歳）は夫によって抱えられながら移動したり、夫が運転するバイクに乗って移動したりする様子が見受けられた。

6. 婚姻について

Xonpao 作業所内で婚姻経験のある女性身体障害者は5名であった。L 氏（33 歳）は、現在シングルマザーとして一人息子を作業所内で育てている。N 氏（23 歳）は、Minna no Café で働いていた際に、同じ聴覚障害者の男性と結婚し、その後離婚を経験している。B 氏（31 歳）も Xonpao 作業所内で出会った同じ身体障害をもつ男性と結婚し、現在妊娠中である。N 氏（37 歳）も2回の婚姻経験があり、現在は前夫との子どもを親戚に預けて夫と作業所内で生活している。また、どちらの結婚も相手は非障害者男性であった。このように身体障害があることが婚姻への障害となっているわけではなく、同じ障害者コミュニティの中で配偶者を得たり、Facebook などの SNS を通じて出会いを得て結婚したりしている場合もある。このような婚姻経験のある女性身体障害者の結婚事情を尋ねると、非障害者男性と結婚する場合は、相手に障害への理解がないと結婚は難しいと述べており、また障害者男性と結婚する場合でも、雇用が限られているため経済的な面で生活を送ることが難しいとも述べていた。一方で、婚姻経験のない女性身体障害者たちの結婚をしていない理由は、障害を理解して結婚しようとする男性やそのような相手と出会う機会がないためであり、機会があれば結婚はしたいという意志を表示していた。また結婚をしたい理由としては、C 氏（35 歳）は、自身の親・兄弟姉妹に代わって生活の面倒をみてくれる人が必要なため配偶者や子どもが必要となると述べていた。このように、身体障害が理由で結婚の機会が減っているのもまた事実であり、生活を安定させるために、配偶者には経済面での援助やケアの担い手としての役割を期待し、婚姻を必要としている傾向がある。

7. 雇用・仕事について

女性身体障害者が口を揃えて述べていたことは、障害者の雇用がほとんどないということである。村では、家事や農作業、物売り、シン作り・刺しゅうなどの仕事はあるが、身体障害者にとって会社や店で働く、公務員になるといった仕事を得る機会が少ない。また、ある程度自分自身で移動ができ、非障害者とあまり変わらない生活ができる女性身体障害者よりも、聴覚障害や視覚障害をもつと特に仕事を得ることが難しいと述べていた。Xonpao 作業所のような障害者支援施設により、雇用支援が行われているが、支援に辿り着ける身体障害者も少ないと

も述べていた。しかし、一般的なラオスの村での生活に限り、女性身体障害者も女性が行う仕事を担えるため、村での女性非障害者と障害者の違いはあまり大きくない可能性がある。

《総括》

今回の調査では、女性は男性に従順であることが美德とされ、家族のケアの担い手が女性となりがちなラオスのジェンダー規範の中で、女性身体障害者たちは身体障害と女性という個人の属性が重なることで、よりラオス社会で生きづらさを抱えているのではないかとする仮説を立て、調査を行った。しかし、調査地である Xonpao 作業所での事例の場合、女性身体障害者たちは一般的なラオスの女性非障害者とあまり変わらない生活を送っており、婚姻や家の仕事などを担うことで生活ができている。また、作業所の中でそれぞれの身体障害に応じて相互にケアをし合ったり外部からのケアを頼ったりして生活することができていることがわかった。これらの事例からは、特筆すべき女性身体障害者である故の「社会の障害」が明確に捉えることはできなかったが、婚姻や経済活動の面で「社会の障害」を抱えている可能性は大いにあるため、より多くの個々の女性身体障害者の事例から、都市部の支援施設で生活する女性身体障害者と村で生活する女性身体障害者の比較、男性身体障害者と女性身体障害者の比較をおこなっていく必要性が見えてきた。



身体障害者用のバイク



コーヒー豆の選定作業を行う
女性身体障害者たち

今後の展望 Prospects for the future

今後の展望としては、今回の事例から雇用に関係する社会課題を抱えている可能性が見えてきたことから、特に女性身体障害者の経済活動を中心にさらに女性身体障害者への聞き取りやインタビュー調査を行う。また、Facebook を通して支援に辿り着き、配偶者との出会いを獲得しているケースが多いことから、SNS での障害者のコミュニティの動きを調査することで、女性身体障害者の実態を明らかにしていく。